

二次小説  
a

二〇二五年一月四日 初版発行

二〇二五年九月二日 修正版発行

発行者 a

印刷所 vtylostyle

Twitter @a23324094

<https://www.pixivnet/users/58321047>

© a 2025

本作品は非公式の二次創作作品です。

本作品の無断改変および営利目的での複製・転載を禁じます。

## 二次小説

在り方なのよ。集まって整って、単純なものからどんどん複雑になってく、素粒子から星へ、銀河へ、そういう全宇宙の潮流が確にある。何かを選び出すって行為はそういう宇宙の秩序化の振る舞いそのもののなの。コインの表か裏かを選ぶ。一〇〇万のくじから当たりを選ぶ。カフェオレをコーヒーと牛乳に分ける。あ、これできちゃったら結構やばいよ。悪魔の所業ってやつです。マクスウェルの悪魔。だけどそれに近いことは現実には起こってる。ように見える。だって原子や分子、ほんといたらカフェオレみたいに混ざってグチャグチャになりそうなのに、いつの間にか集まって星や銀河っていうさまざまに複雑なものが出来上がっちゃうんだから。それは、無数の配置の中からそういう配置が選出されてるってこと。あー、もちろんエントロピーが増えるっていう自然法則は破られたわけじゃないよ。宇宙全体、未来永劫を考えればいずれは宇宙は拡散して一様になっちゃう。いつかはすべてが熱エネルギーになって、変化の無い死の世界になる。でもね内海君、今の宇宙は、あたしたちがいるここは、まだ途中なんだ。平衡点に達してない。たまたまいろんなものがちよつとだけ偏って、局所的にエネルギーの出入りがありさえすれば、宇宙は勝手にどんどん複雑化、秩序化してく。その最先端ではいつも何かが選ばれて、秩序が形成されてく。この宇宙に新しい何かを生み出していると

り現在に至る。とはいえフルタイム勤務はよほどの事情が無い限り頑なに拒み、一日四時間のシフトを定期的に守り続ける内海集司の生活は今でもかつかつだった。

取り出したクリム色の名刺を眺める。店名の下に印刷された「横浜店 内海集司」という文字。これまでは版元営業との慣れないやり取りの記憶を呼び起こすアイテムでしかなかった。だが内海集司は初めて、この小さな紙片に誇りと矜持を感じた。

俺は書店員だ。

あの日、髭先生が、外崎が、教えてくれたこと。

星は小説と同じで。人も小説と同じで。

そして小説を読み手に直接届けるのが書店員だ。

作家、版元、取次、書店。人が作り出した嘘がまっすぐに向かう一本の矢印の最終工程。人の心の意味を増やすためのラストワンマイル。

果てなく生み出される人間精神の昇華体である小説を版元に発注し、開梱して棚に並べ、カバーを掛けてお客様に手渡す。

それが、俺の仕事だ。

文庫担当として『竜馬がゆく』四巻の在庫が店内にあることは確信していた。司馬遼

本作は小説『小説』の二次小説『二次小説』です。この物語はファンフィクションです。

にもかかわらず、それを潔しとしない不埒な精神がここに存在した。

読むだけでいい、意味を外界から取り込めばいいと言われているのに、内側からも作り出してあわよくば外に出したいなどと、傲慢にも見果てぬ夢を抱き始める。しかも易きに流れ、外から取り込んだ意味の一部を傍若無人に使い回し欲望のままに改変するという暴虐の限りを尽くす。世界の理に逆らう不敬だとはわかってはいるのに、それでも血迷った驕慢な精神はもはや衝動を止めることができない。

それは編み上がった答え、冒さざるべき原初の理に対して刃向かう邪な愉悅であり、その読者の内側たる精神は繰り返し、果てもなく、嘘で作られた空想を勝手にいじくり回して次の虚構を生み出せないものかと手を伸ばし続けることとなる。その虚構の名は二次小説という。

(了)

太郎のロングセラーは一通り棚差しされている。シリーズ物だから欠本しても気づきやすいし補充もこまめにかかる。新年度を迎えるこの時期にはそれなりに動く類の本だが、今年は松坂桃李主演の大河ドラマが好調なこともあり、幕末・明治期が舞台の作品は例年より多めに仕入れている。たとえ今朝たまたま売っていたとしても棚下ストッカーかバックヤードに一冊は確実に残っているはずだ。前週に棚卸しを実施したばかりで、在庫の読みには自信があった。

内海集司は、覚悟を決めた。

「その……書店で、働いてて」

名刺を差し出す。

「四巻ならうちに在庫あると思う。……差し替えて済む話じゃないかもしれないけど、もし新品が必要なら」

少年が作業の手を止める。名刺の角に燦然と青く輝く書店ロゴを見た途端、少年の顔に僅かに残っていた警戒の色が完全にかき消えた。小さく息を呑む音が内海の耳にも届く。まるで魔法のカードだった。内海集司の中にいつしか忘れていた初心が蘇る。そうなのだ。巨大書店はどんなテーマパークも敵わない夢の王国で、そうでなければ内海も

宇宙には集合して秩序化する流れがある、ように見える、って辺りまでだった気がするよ。あたしもあの頃はまだブラックホールの熱力学界限あんまやってなかったし。ホログラフィック原理とか盛り上がる前だったからさ」

(真面目に聞くくんじゃなかった……)

「いや待って、でも髭先生、なんか自力でこの辺に辿り着いてた気もするのよね。あたしの取材受けた後に出た小説、こういうことも書かれてた気がする。うつすらとだけど」

「こういうことって……宝くじに当たったらエントロピーが減る、とかいう」

「んー、まあ合ってる。合ってるよ大体ね。起こりえない話ほど、情報量を最大化してエントロピーを減少させる。でもね、んんー、惜しい。あたし的にはちよつとニュアンス違うかなあ。あくまであたしの印象、雰囲気ではないけど、当たったっていう受動的な感じとはちよつと違う気がするんだよね。当たったというより当てたら？ なんだろ、待って、もつといい言葉あった。知る、わかる、区別する、選ぶ」

「選ぶ……」

「結局、サイコロもくじも、選んでるってことなんだよね。それって宇宙の自然な

葉ではないと本能的に理解し安堵すると、外崎、ちゃんと見張つとけよ、と思いながら内海集司は大好きな本に満ち溢れた、最高の世界へと戻っていった。

平積みの方の横を通りかかった一人が表紙に目を留め、逡巡することなく速攻で購入した。我慢できず日曜夜の二五時に本を開く。それはとある読者が主人公の物語で、その中にはいくつかの、妙に的確なことが書いてあった。

小説は。

読むだけでいい。

それは宇宙の法則、この世の摂理であり、主人公が幽寂の旅路の果てに辿り着いた、ただの事実だった。

小説の最後の一行を味わうように反芻し、腹の底から深く長い息を吐き出して、内海集司は読んでいた文庫本からゆつくりと顔を上げた。読後の余韻が心の中で渦を巻いている。夢の終わりに似たこの空間識失調が内海集司は好きだった。充足感と淋しさとが緬い交ぜとなった感情にしばし身を委ねていると、吊り革を掴む手に軽くGが掛かり意識が現実と呼び戻された。目の前の車窓に焦点を合わせると、いつしか春の午後の光はすっかり喪われ、三月とは思えない激しい驟雨に煙るモノクロームの田園風景が右から左へと流れていく。内海は傘を持って来なかったことに気づき暗澹たる気分になった。このままアルバイト先までは濡れずに行けるが、深夜に自宅アパートまで自転車を漕ぐと鞆の中の本は確実に濡れる。ビニール傘を買う金があるなら本に回したい。帰宅時には雨が止んでいることを祈るしかなかった。鬱々とする内海集司を乗せたJ R 横浜

れに逆らつてゐる。逆らつてゐるだけでもすごいのに、ともかく一気にエントロピーが減った、それが大事。サイコロでも減ったけど、百万本のくじのほうが減り方えげつない。つまり、その事象が起こる確率が小さければ小さいほど、知った時のエントロピーがガクッと減ること。百万本から当たりを引くなんて、めっちゃ起こりにくい、珍しい、有り得ないって思うでしょ。そういう嘘みたいな情報ほど情報量は増えるしエントロピーは減るの。だから情報量は「驚き度」なんていう言い方もされてる。サイコロ振って1が出ても驚かないけど、宝くじ当てたら驚くよね。有り得ない、びっくりするようなことが起こる時、そこでは必ずエントロピーの減少が起きてる。しかもさ、このエントロピーをさらにドーンと一気に減らせるすごい方法がある。複数の独立な事象が同時に起こればいい。もうね、やばい。たとえば一〇〇万のくじを二連続で当てたら一〇〇万×一〇〇万で一兆分の一の確率になる。天文学的確率ってやつ。エントロピーの減りもすごいことになる。って、なんでこんな話になったんだっけ」

「なんでって……髭先生の取材で出た話をされてたんじゃ」

「あー、そうだった。そうだったっけ？ んー、いや、やっぱここまで話してなかったかもしれない。何しろ二〇年も前だから記憶怪しいのよ。確か髭先生に話したのは、

家から片道四〇分かかるこの店舗をわざわざバイト先に選ばない。

「……ここから五分くらい歩くけど、良かったら出勤がてら、案内もできるから」

買ってあげようなどと言えはかえって断られるだろう、と内海は言葉を濁す。だが少年の中で何かが勝手に繋がったらしい。

「いっ、行きます。買いに。今から、あの」すっかり魔法にあてられた少年の目に星が踊っている。「ありがとございます、あの、ほんとに、何から何まで」びよびよことと小動物じみたお辞儀を繰り返しながら、少年は何度も礼を言った。予想以上の食いつきの良さに内海は拍子抜けする。

少年が本をティッシュで包んでリュックにしまい込む間に、念のためこっそりスマホで四巻の在庫状況を調べる。僅少ではあるが欠本はしていない。安堵しつつ、内海集司は少年を連れてホームの階段を降りる。改札口から中央通路に出て雑踏を東に進む。大壁画が出迎えるエスカレーターを下り、賑やかな地下街をひたすら直進する。道中は互いにほぼ無言だったが、不思議と居心地は悪くなかった。一度だけ少年が辺りを見回しながら、

「あの、横浜駅って……もつと工事ばかりしてるのかと思ってました」

線各駅停車<sup>ざくろぎちよう</sup>桜木町<sup>さくらぎちょう</sup>行きは、荒れ模様の関東平野南部を北西から南東に向けてひたすらに轟進している。横浜線はその名に反して横浜駅に行かない完全に初見殺しの路線で、JRも良心が咎めたのか数本に一本は終点の東神奈川<sup>ひがしかながわ</sup>駅でそのまま根岸線<sup>ねぎし</sup>に直通して横浜駅以遠へ乗り入れる。内海集司が乗車しているのも直通電車で、出発点の八王子市<sup>はちおうじ</sup>、内海の住む相模原市<sup>さがみはら</sup>、そして終点の横浜市を結ぶ行路は全長四〇キロを超える。山間部と沿岸部の気候の差は決して小さくない。地元の空模様は当てにならないと思い知らされた内海集司は浮かぬ顔で仄暗い空を眺める。雨に霞む日産スタジアム<sup>にっさん</sup>を通り過ぎ、小さな川を渡ると俄にビルが増えてきた。次の新横浜駅は新幹線の乗換駅で乗降客が多い。春休みの今日は混むだろうと内海はぼんやり考えた。案の定、車内の多くの乗客が降りる気配を見せ始める。目の前のロングシートが一気に四人分ばかりと空いたが、内海集司はそのままやり過ごした。

列車が駅に滑り込む。ドアが開くと春の雨の匂いが車内に流れ込んだ。スーツケースや土産物の紙袋、濡れた傘を持った乗客が入れ替わりに続々と乗り込んで来る。内海集司の前の空席もすぐに埋まり、平日昼下りの横浜線としてはそこそこの混雑具合になった。内海の右隣を幼児を二人抱えた男女が陣取った。一家揃って虚無の表情に内海

横浜港を一望できる大きな窓がある。児童書担当は本の日焼けを気にしてブラインドの調整に毎度苦労していたが、売り場に陽光と解放感をもたらすこの借景を内海集司は密かに気に入っていた。棚の合間からちらりと窓の方を窺う。さすがに虹は直接見えないが、店内に差し込む光は確実に力を取り戻している。これなら自転車で帰れると内海は安堵し、欠本チェック作業を再開する。「虹！ すっげー！」はしゃぐ子供の声に、点在していた客が窓に吸い寄せられ、興奮が文庫棚まで聞こえてくる。「ほんとだ」「虹出てるよ」「ねえおかあさん虹」「めっちゃ綺麗」「でかくね？」「二重じゃん」「エグいねえ」「アップしよ」「おとかでいじにあらなどうか」

内海ははっとして作業の手を止めた。その声には聞き覚えがあった。この世のものを超えて美しい声だったが、氷のような侮蔑と同時にどこか屈辱のひびきを孕んでいた。耳をすますとさらに「あがれきすむねかこむかすおしじち」と聞こえたような気がしたが、それきり声は途切れた。首を伸ばして児童書売場の方を見遣るが声の主はわからない。幾重にも連なる棚の向こうに、窓枠に四角く切り取られた、薄闇のたれそめる空がただ見えるばかりだった。内海はただ口の中で「あがれきすむ」と小さく二度繰り返した。だがそれは、もはや内海集司とは何の関係もないことだった。自分に向けられた言

と話しかけてきた。

「え？ ……ああ、昔はよく工事してたよ。数年前に全部終わったけど」  
「そうなんですね。……や、その」訝しげな視線に気づいた少年が慌てて弁解する。  
「最近『横浜駅SF』って本読んで、気になって」

少年が挙げたのは横浜駅を舞台とする柞刈湯葉<sup>いずかりゆは</sup>のSF小説で、内海の勤務先でも横浜本フェアで大きく扱ったことがある。広く浅く乱読するタイプかな、と少年に勝手に親近感が湧いた。

「ああ、あれか」十年ほど前に読んだきりだった内海は断片しか覚えておらず、自動改札には気をつけなよ、と精一杯の冗談を繰り出すと少年は「えー」と瞠目し、ですよね、ここ横浜駅の中でもすもんね、あの、あれですよね、構造遣伝界とか、などと早口で喋りだした。内海はその単語を完全に忘れていて、そうそう、などと情報量ゼロの返答をしてしまい、コアな談義への期待に目を輝かせる少年に応えられないことを心の中で詫びた。少年も色々と察したのか、興奮をやや恥じ入るように口をつぐんで会話は終わった。少年の舞い上がり方は、ずっと一人で本を読んできた人間が同類を見つけた時のそれだった。これまであのノートが感想の唯一のはけ口だったのだろう、と内海は再び根拠

「ええと……多分」

「よし。じゃあサイコロ振ってえ、一の目が出たとする。確率は六分の一。この時の情報量は6の対数なの。えー、んんー、ごめん電卓使う。対数の底は2とするよ。ええと、2.585だ。一の目が出たっていう事象の情報量は2.585ビット。この時エントロピーも同じだけ減ってる。も一つ行くよ。一気に選択肢増えます。百万本のくじ。千万本にするか？ まあ百万本でいつか。くじが百万本あって一本だけ当たりが入ってる。この場合の情報量は、百万の対数。ええと、なんと19.93ビットだ。あれ露骨に嫌そうな顔しないでよう」

「小学校で対数は習わないですよ」

「くそ、わかったよ、細かい導出はスルーしていいから。ともかくなんか、でかい数字出たって思ってたければ充分。話戻すよ。19.93ビットの情報量が得られた。エントロピーはあ、どうなった。一気に19.93ビット減った。はい、どちゃくそ減りました。すごい。どうよ」

「……すごいんですかそれって」

「すごいよ。ほら、さっきエントロピーはどんどん増えるものだって言ったじゃん。そ

心の中で問い掛ける。

答えは、返らない。

外崎は旅立った。

幽寂の向こう、

時の果てに。

それでも。

内海は、

続ける。

外崎、俺は。

お前の書いた小説を読む。

そして新たな読み手に届け続ける。

小説を集め、選び、並べ、カバーをかけ、手渡しする。

それが書店員である俺の仕事で。お前のために、俺ができる全てで。

「あ、虹」

児童書コーナーの辺りで子供の叫ぶ声がして内海集司は我に返る。児童書の区画には

集司はご苦労様な事だと思った。一日の大半を読書に費やせる身分はありがたくもあり、また少々後ろめたくもあつた。読み終えた本を鞆にしまう。別の本を取り出して読み始めようかと考えてやめた。目的地の横浜駅まではあと一〇分程だし、今日はこのまま余韻に浸っていたい気分だった。

漫然と目の前の席を眺める。先刻まで年配の男性が舟を漕いでいた席には、新横浜から乗ってきた一人の少年が座っている。年の頃は十四、五といったところか。少年は抱えた黒いリュックから一冊の文庫本を取り出すと、葉を挟んだページを開いて貪るように読み始めた。内海集司は書店員である。それも文芸と文庫の担当である。職業柄、他人が読んでいる本は気になるもので、それとなく観察する。榛色のカバーはこの書店のものか不明で、かなり草臥れて見える。小口から覗く紙も日に焼けている。書名は見えないが厚みは標準的で京極夏彦とかではない。版面の濃さはライトノベル以上純文学未満。スピンや天のカットの有無、ノンブルの位置などから内海の意識は半ば自動的にレーベルを絞り込む。文春文庫っぽいが随分古そうだと当たりをつけて勝手に満足し、今度は読み手に焦点を合わせる。少年は一枚また一枚とページを捲っていく。熱中しており、興奮が顔から見て取れる。結構な速読だが決して雑に読み飛ばしているわ

よ。答えが一つに定まる。そうするとわからなさが取り除かれる。この時エントロピーは減ってるの。わかるかなあ」

「いえ、ちょっと全然わからないです」

「なんか悔しいなあもう」

「すみません……」

「待つて。違くて。自分の説明が伝わらないのが悔しいのよ。自分で自分が悔しい。ああもう緑小であんなに鍛えたのにさ。ごめん内海君もつかいチャレンジさせて。いい寄合則世、ここは緑小の理科室、目の前に小学生がいると思って」

「……はあ」

「よしじゃあ具体的な例で説明するよ。たとえばサイコロね。サイコロ振ります。振つてさ、奇数が出たか偶数が出たか教えてもらつたとする。この奇数か偶数かっていう情報の量がちょうど1ビットなの。1ビットってそういう定義。AかBか、有りか無しか、そういう二択のどっちかがわかつた時の情報量。でえ、1ビットの情報量を得たつてことは、わからなさ<sup>ク</sup>が1ビット減つたことになる。エントロピーが1ビット減つた。情報理論ではそういう風に考える。ここまではOK?」

無い想像を広げる。読書は本質的に孤独な行為だ。

地下街を突き当たるとデパート地下二階のエントランスに辿り着く。デパートの七階には内海が働く書店がある。いつもなら左手の従業員用入口に向かうところだが、今は少年を連れているのであくまで客としての入店になる。エレベーターで七階に上り、巨大な雑貨店を突っ切つて書店の前に出る。雨のせいか春休みにしては客はまばらで、奥のフェア台でバイト仲間が本を補充しているのが見えた。シフトまではまだかなり時間があつた。内海集司は店の前に少年を待たせて店内に入り、社割を利用して『竜馬がゆく』四巻を自腹で買った。幸いレジに他の客はおらず、レジ係の後輩は怪訝な顔をしながらもレジ打ちとカバー掛けをやってくれた。内海が戻ると、少年は催事ワゴンの前で平積みの新刊本を眺めているところだった。入口脇の柱の陰に少年を呼び寄せ、そつと本を差し出す。反射的に本を受け取つた少年は訝しげにカバーを外してみ、それが新品の四巻であることに気づいてひとしきり狼狽えた。

「え、あの、なんでカバー」

「要なら外してくれていい」

「いやあの、そうじゃなくて……これって、もしかしてお会計って」

けではないことを、絶えず変化する表情が雄弁に示している。すでに本の終盤だったらしく転がるように読了すると少年は本を閉じ、名残惜しげに小さく嘆息した。相当良い本だったのだらうと内海が頬を緩めていると、やおら少年が本のカバーを外した。黄色の背に白い表紙のシンプルな装丁が現れる。

見るなり小さく声を上げそうになるのを内海集司はこらえた。文春文庫、司馬遼太郎<sup>しばりょうたろう</sup>『竜馬がゆく』新装版の四巻。一二歳の内海集司と外崎真<sup>とのざまこと</sup>を引き合わせたシリーズだった。思えば『竜馬がゆく』読了はやはやの人間を目の当たりにする僥倖は内海集司の人生において二度目で、あの日の外崎の放心を通り越して呆けたような顔がまざまざと思い出される。対照的に少年の瞳にはいかにも利発そうな光がある。だが深く感銘を受けているらしいことは顔つきから察せられた。そうだろう良い本だらうと内海集司は再び笑みを漏らし、しかも四巻か、と少年の胸中を慮<sup>おもひ</sup>った。『竜馬がゆく』は三巻辺りから加速度的に面白くなる作品で、時代が音を立てて回り出し竜馬と周囲の明暗を分けていく四巻はひとさわ内海の印象に残っていた。自分の好きな本を誰かが読んでいるのはやはり愉快で、特にそれがこの年代の少年なのには格別の感慨があった。

続けて少年は興奮冷めやらぬ顔でリュックをこそごと漁り始め、五巻を出すのだらう

きつとそれは比喩ではない、ただの事実だった。

万物が集まって秩序を生み出すのと同じく、小説が集まって整然と並べられたこの空間は宇宙の自然な在り方に他ならない。空間は書店と呼ばれており内海集司は空間を司る書店員だった。

本棚に配架する本の選び方、平台への陳列の仕方。たった一つの配置を選び出す時エントロピーは大きく減り、宇宙の意味が増す。それが書店員・内海集司の仕事であり、棚に本を並べることは書店を訪れる人の内面に意味を送る行為そのものだった。

書けないと思っていた。書きたくないと思っていた。外崎真には天賦の才がある。詩情豊かな物語を生み出す能力、内側の意味を外に出して伝える能力がある。内海集司にはそれが無い。ずっと、そう思っていた。

だが棚を作り本を並べるだけで、

そこに豊かな意味が生まれる。

それは内海集司が生み出す、

一つの「物語」であった。

外崎、と内海集司は今、

「ああ、済んでる」

「いや、そんな」

「社割、利くから」

「しゃわり……」

「書店員は割引で本が買えるんだ」

少年はばあつと顔を輝かせた。将来のバイト先を心に決めたらしかった。だが所詮、割引は割引でしかないと気づいて、

「や、でも、せめて実費分くらいは」

と再び慌てた。

「いいって、いいって」

手をひらひらさせながら内海は、大人の余裕をひけらかすような自分の言動が妙に気恥ずかしくなった。一人っ子で甥も姪もない内海は、子供との接し方がよくわからない。だが十代なら文庫一冊でも大きな出費だろう。

「でっ、でも」

子供扱いされたことにムツとした様子で少年が反論しようとする。

だったのが整理された。わからなかったものがわかった。混沌が秩序になった。内海君の頭の中で起きたこと、それとおんなじことが宇宙で起きてる。あたしの話が内海君に伝わったのは、この宇宙がそういう風に出来てるから」

「ええ……さすがに飛躍しすぎでは」

「してないよ。ああー、なるほど、もしかして、もしかしくなくてもだけど、比喩だと思ってるでしょ。違うから。比喩じゃないよこれ」

（比喩じゃない。どこかで聞いた気がする。ああ、そうだ、髭先生だ。小説は星と同じなのかなって話をした時）

「比喩じゃないってのはあ、さっき話したエントロピーね、あれ、情報量と密接に結びついてる。何かがわかるとエントロピーが減る。ほんとだってば。そんな不信の目で見ないでよ。情報熱力学っていう分野がちゃんとあってね、まあいいや、ええとね。エントロピーってえ、乱雑さ、無秩序さを表すってさっき説明したけど、これって言い換えると「わからなさ」でもある。不確かさと言ってもいいよ。何もわからない状態って混沌としてるでしょ。ああかもしれないけどこうかもしれない、みたいな。取りうる可能性がたくさんあって、どれなのかわからないっていう。そんでえ、何かわかったとする

があるのではないか。外崎の本を店頭から絶やさないために。

広げたイメージが収束し、飛ばした思考が戻ってくる。夢の終わりに似た感覚は、小説を読み終え浮上した時のあの空間意識失調によく似ていた。ゆらりと立ち上がり、一歩下がって目の前の書棚を眺める。棚に差し込まれた一冊一冊が恒星のように輝いている。その裏にも背後にも棚が整然と立ち並び、さらに担当のコナーの外側にも果てしなく続いている。自分を取り囲んでいる何千何万という物語、その一つ一つに異なる世界、異なる人生、異なる意味が内包され、しかも人の心はそれらを全て取り込めてしまうという事実にあらためて圧倒され、目眩がした。人は考える輩であり、考えて考え抜いた果てに小説なんていう大それた仕組みを考えついてしまい、しかも寄合によればこれでもまだ途中なのだった。

そんな結晶体たる小説の、組み合わせにすら意味が宿るとするならば。

いつかの髭先生の言葉を思い出す。

小説が星と同じであるなら。

書棚は銀河と同じで。

書店は宇宙と同じで。

うと内海は思ったが代わりに現れたのは大学ノートと緑色のボールペンだった。ペンを片手に少年がノートを開く。最初のページには大きく「読書帳 2027」の文字。少年がページを繰る。びつしりと細かい字が書き連ねられているのが見えた。今どき紙に感想メモを記すストイックな姿勢に内海は若干の畏怖の念を覚えた。少年は文庫の表紙に目を走らせながら「50・竜馬がゆく／四」とノートに記していく。さらに著者名、出版社名を書き写して、本に再びカバーを掛けた。失礼とは思いつつ内海は眉根を寄せて目を細め、ノートの続きが書かれるのを待った。元々の目つきの悪さがさらに凶悪になったが見ずにはいられなかった。

少年は意気揚々と「四巻目。読むのが止まらない。ついに」まで書いて、そこでペンを止めた。無意識に内海集司は顔を顰める。寸止めされた気分だった。ついに何だ。ついに軍艦か。ついにさな子か。

それともついに、武市半平太か。

内海集司は待つ。だが少年は動かない。右手にペン、左手に文庫本を持ったまま化石したように座っている。少年の瞳は焦点を結んでいない。どこも見えていない。少年の精神は内に内に向かっていく。言葉を探している。心の内に増えた新しい意味をつらまえ

あるのかもしれない。あるように見える」

「……………」

「あれ伝わってる？ 伝わってるかなあ。ついてこれた？ ちょっと、リアクションしてよね。無反応って心折れるのよ」

「はあ……なんかまだ頭の中グチャグチャですけど」

「伝わってない？ シヤノン限界なはずないんだけどな。伝われば。駄目か、わかったよ、じゃあもう一度最初から行くよ。シラードエンジンを仮定すると1ピットの情報是非可逆に消去する時に熱浴に対して」

「いや、あの、ええと、集合して秩序化する流れ？ があるらしいってところまでは」

「なんだ伝わってるじゃん。言つてよう」

「……わかった気になってるだけかもですが」

「そりゃー〇〇パーセント理解してもらうのは無理よ。こっちもだいたい噛み砕いて話したし。でも雰囲気だけでもわかってもらえたんなら、あたしも説明した甲斐あった。ていうか、そうだ、それだよ。まさにそれが宇宙でも起きてるって話をこれまで延々としてたわけ。何かがわかるってことこそ、宇宙の自然な流れそのものの。グチャグチャ

「俺も」 非番とはいえ一応店先なので、一瞬悩んでから内海は言い直す。「……自分も昔そうしてもらった」

幼少時、本は父親に買ってもらったものだった。買ってもらえなくなった中学以降は、もっぱらモジャ屋敷の蔵書が頼りだった。実質的に髭先生が本を買ってくれていたのに等しかった。実際、読みたいと言った新刊がいつの間にか書庫の隅に追加されていたことも何度かあった。もつともそれは髭先生も強く興味を示した本に限られてはいた。

そんな、と少年は言いかけたが、目の前の大人を説得できる材料を持ち合わせていないことを早々に悟り言葉を呑み込む。

「……わかり、ました。じゃあ、ありがたく頂戴します。でも参ったな」 潔く諦めたはずがまだ逡巡している。「……そうだ。じゃあせめて、他の本も買います」

「え、いやいやいや」 今度は内海が狼狽する。

「ちようど欲しい本、いっぱいあるんで。今月のハヤカワ文庫のラインナップ、ちよつとすごいですし」

「そんな気を遣わなくていいって」

「いえっ、買います。買いたいです。お願いします」 少年は勢いよく頭を下げた。

ようとしている。表情はぼんやりしているが、脳髓では非常な奮闘を行っている。現れては消える泡沫の如き想念、言語化される以前の雲のようなものをなんとかして収束せんと悪戦苦闘している。内海集司はどこか共感したものを感し始める。感想が出てこない苦しみはよく知っていた。特にその四巻はそうだな、言葉にならないよなと内海は思った。だが同時に彼我の差は無視できなかった。書きたくて書けないのと書きたくなくて書けないのとは決定的に違う。書くまでの苦しみさえ、ノートに毎回律儀に感想を記録するタイプの人間にとつては楽しい一人遊びの一部でしかない。内海集司が決して到達し得ない境地に少年は立っていて、きつと間もなく言葉を拾い集めて感想を書き上げる。それで良い、自分は読む、読み続ける、ともう何千回となく擦ったいつもの結論を内海は心の中で唱えた。

そのまま少年は五分以上も硬直していた。だから列車が東神奈川駅に到着し、立ち上がった隣の乗客の大きな荷物が少年の左手から文庫本を弾き飛ばした瞬間もただ茫洋としていた。当の乗客も何も気づかずに、あるいは気づかぬふりをしたまま、人波に紛れて消えた。『竜馬がゆく』四巻は見開きのまま低く飛び、ドア前の床に落下した一秒後にはもうスーケースに轢かれた。蹴飛ばされ、踏まれ、濡れた傘に引き摺られた。大

ついさつき少年が外崎真の小説を抜き取った跡だった。穴は塞がなければならない。欠本は補充せねばならない。書店員の本能が疼く。棚下のストッカーを引き出して、返本できずにいた在庫を棚に差す。あるべき姿を取り戻した棚に満足する。同時に、内海集司の中に新たな平台展開のイメージがぼんやりと湧き上がる。外崎の小説を追加発注して、あえて髭先生の小説の隣に並べてはどうか。外崎が好きだった作家の本、外崎の小説にインスピレーションを与えた本、髭先生が嬉々として感想を語っていた本。それらの本達も近くに置いたらどうか。幸せな日々の思い出が蘇り、書影が脳裏に次々と浮かぶ。想像の本棚は次第に明確な輪郭を帯び、選書のイメージが有機的に膨らんでいく。どこかモジャ屋敷の書庫にとてもよく似ていたが、決定的に異なる点があった。三十年間本を読んで生きてきた内海集司の内面がその書棚の陳列には顕れていた。内海にとつて外崎と髭先生が内包する意味そのものだった。もちろん外崎と髭先生の関係を明かすつもりはないし、客に気づいて欲しいわけでもない。売り上げが伸びる確証もない。だが、一度くらいやってみても良いかもしれないと内海は思った。この二冊の組み合わせが持つ可能性に気づかせてくれたのは少年で、第二、第三の奇跡を内海は見てみたかった。外崎真のことを、内海集司は誰よりもよく理解している。だからこそ、やれること

「買わせて、ください」  
「そこまで言うならまあ……。でも無理はするなよ」内海は申し訳なく思いながらも、この少年はきつと欣喜雀躍して本を選ぶだろうなと思った。確かにお互いにとつて最良の選択かもしれない。同時に、外崎ならここまで頭が回っただろうかとも思う。あの頃の外崎真と比べると、少年はよほどしっかりしておりいかにも聡そうな顔つきをしている。外崎のような野放図な天真爛漫さはなくむしろ内海に似た内向的なベクトルも感ぜられたが、内海が書店員と知って安心したのか、いまや怯えはすっかり消えていた。新しい本を買える喜びのためかやたらと饒舌になっている。

「大丈夫です！ 今年のお年玉、全額持つてき」

「そういう話は大声でしないほうがいい」

「あつ……」少年は赤面して小声になった。「そう、ですよね……すみません。でも、あの、夢だったんです。大型書店で予算一万円、制限時間一時間つてやつ」

この歳で豪遊しすぎだろと内海は思ったが、まあ自分の金をどう使おうと自由だしなと思ひ直す。本読みにとつて夢の企画なのは間違いない。

少年はリュックを開けて新しい四巻をしまうと思いきや、逆に傷んだほうの四巻を取

よりによつてこの二冊を、この二冊だけを、同時に選ぶものだろうか。外崎真という作家の名前すら知らなそうな人間が、わざわざ棚からこれを迷いなく抜き出すものだろうか。

そんな嘘のような話があつていいんだろうか。

内海集司は混乱する。現実には思考が追いつかない。溺れてもがく指先に何かが触れる。選ぶ。

本を選ぶ。

何万、何十万という本の中から、相関が無いはずの二冊の本を選び出す。

天文学的な確率で。

どこかで聞いた気がする。

指先をかすめたそれを必死に引き寄せて掴む。長らく忘れていた記憶だった。

三年前、髭先生の行方の手がかりを求めて、東大柏キヤンパスの寄合則世の元を訪れていた内海集司。寄合から宇宙の法則について説明を受けたが、この話には続きがあった。

「宇宙は散逸して拡散する。けれどそれとは逆の、集合して秩序化する。そんな流れが



「無理に読めとは言わない。今でなくてもいい。だけど、その二冊を選んで自分を信じてやれ」

「それって……どういう」

「まあ、読めばわかる」

そんなあ、と言いつつも少年は二冊をじっと見ていたが、やがて顔を上げて「読みます」と言った。少年の遠い視線の先を内海集司は想像しようとしたが、そこには無数の本が整然と並ぶいつもの書店の風景が見えるだけだった。同時にレジ係の視線がいよいよ臨界に達しつつあるのに気づいてしまい、じゃあなと言って内海は少年と別れた。何度も礼を連呼する少年を尻目にそそくさと店を出て、急いで地下に降りる。

従業員用入口から改めて入館する。バックヤードでエプロンをかけ気を引き締める。引き継ぎを行いハンディターミナルを手売り場に出る。遠目に見渡すとちくま文庫の棚の前にまだ少年がいた。すでに五、六冊の文庫本を手になっている。書店の創業百周年の記念グッズまで小脇に抱えている。そのままふらふらと新書棚の方に消えるのを見て、大いに悩めと思いながら内海は文庫棚の見回りを開始した。講談社文庫の棚の前に立つ。棚の一角にぽっかりと一冊分の隙間が空いている。

量の乗客と荷物が降り、すぐさま大量の乗換客が乗ってくる。本に気づき除けた者もいたが、それ以上に人の流れは強かった。

内海集司からは全てが見えていた。わずかに数秒のうちに、嵐に舞う葉のように本が翻弄され蹂躪されるのが見えた。咄嗟に体が動く。車外に飛ばされることだけは避けねばと思った。乗り込んでくる客の合間を縫って手を伸ばし本を拾い上げて少年の前に戻る。少年はようやく本が手元に無いことに気づき半ばパニックになっている。必死に周囲を見回し、腰を浮かしてあわあわと本の行方を捜している。ドアが閉まり、列車が再び動き出した。

拾った本を少年に差し出す。

突き出された本を前に少年はしばらく凝然としていた。やがて事態が飲み込めたのか、やっとのことで内海を見上げて「あ……ありがとう、ござ………」と消え入るような声で言い、語尾は実際ほとんど聞き取れなかった。おずおずと本を受け取る少年の目に動揺の色が見える。改めて本に目を落とすと予想以上の惨状で、内海は自分の行為が果たして正しかったのか急に不安を覚えた。カバーは破れて表紙の一部が剥き出しになり、ページはぐしやぐしと幾重にも折れ、其処彼処にくっきりと靴跡がつき、全体が雨水

えてしまうような怖さがあつた。背表紙に外崎真と記された一冊が棚に差されていることが、外崎の痕跡をかるうじて現し世に繋ぎ止める舫いのような気がした。だが存在感の薄い作家の本をいつまでも置いておくスペースは無い。先延ばしのための言い訳をあれこれ思案したが、さすがに髭先生と絡めて売るわけにもいかない。髭先生と外崎真の関係を知っているのは内海集司だけであり、世間的に言えば両者は全く接点の無い作家で、それは版元である講談社も同様の認識だった。内海も店頭では割り切って別の作家として扱っていた。そうでもないかと仕事にならないからで、それが三年の間に内海が身につけたドライな処世術だった。

その割り切りが今、内海集司の足元でぐらりと揺らぐ。

少年が髭先生の小説を選んだのはわかる。本屋大賞三位の話題作で実際よく売れている。髭先生の最高傑作なのは間違いないが、客の目に留まるよう内海自身があの手この手で陳列を仕掛けたからこそでもある。

外崎の小説も、もちろん細々と売れはしたし、本来もつと読まれるべき逸品であることを内海は知っている。だから少年が手に取ったのも決して訝しむべきことではない。けれど。

り出した。ひたすらティッシュが挟まれミルフィューユのようになった本と真新しい本を両手に持つて並べ、ふふふと何やらにやけている。古い本の破れたカバーにはbook parという見慣れないロゴが見えたが、どこの書店のものなのか内海集司には心当たりがなかった。

少年が二冊を大事そうに見比べて再び礼を言う。

「改めて、本当にありがとうございました。父の本も、今日買って頂いた本も……一生、大事にします」

それを聞いて初めて内海は、父親の本々についての推測が間違っていたかもしれないことに気づいた。父親から借り、返さねばならぬ本ではなく、父親から譲り受けた本、あるいは受け継いだ本だったのかもしれない。そんな内海の内心を察したのか、少年は穏やかに続ける。

「その、父は……僕が小さい時にいなくなって、だからほとんど覚えてないんですけど、うちに本が少し残ってて」

少年の言葉はからりとしていて、父親に対する鬱屈のようなものは全く感じられなかった。

を吸って斑に茶色く汚れている。余りに痛ましい姿に内海は思わず「竜馬がゆく」四巻の土佐勤王党の壮絶な運命を重ね合わせた。時流の荒波と主君や部下の奸計に弄され、理想と現実の狭間で最期まで謹厳実直であろうとした武市半平太の生涯。かつて苦悶しつつ読み込んだエピソードの数々が走馬灯のように脳裏をよぎった。

「四巻……」

衝き動かされるように内海集司は口に出していた。そして自分の発言に驚いた。独り言なのか、それとも少年への問い掛けなのか、そもそもなぜそんな言葉が自分の中から発せられたのかすら、判然としなかった。得体の知れないわだかまりが心の中でぐるぐると渦巻いている。少年はただ「え」とだけ言った。

「あ、いや、その」内海集司は焦る。反射的に短期記憶から単語がまろび出る。「武市半平太の」

言葉によりやく思考が追いついて内海は顔を歪めた。何を言ってるんだ俺は。

少年は目を丸くしている。本と内海を交互に見比べながら、なぜこの人はこの本の身を知っているのだろう、という顔をする。

「え、は、はい。半平太の」

「そういうことのために小説を読むのは、なんか違うよなって気もするんです。チートアイテムでもマニュアルでもない。……けど、僕、これまで小説に何度も救われてきたのも確かで、だからどうしてもなんか救いとかヒントみたいなものを、小説に求めようとしてしまう自分もいて。むしろ小説と現実を比べてかえって落ち込んだりして。それってどうなんだろうっていう」

その煩悶を内海集司はとてよく知っていた。

「だから、その……いや、本を読んでも最中はすごく楽しいんですけど、ええと、どう言えればいいかな……」

少年は言葉を探している。だが内海集司にはわかる。少年の言いたいことが、自分のことのように心に浸透する。そして少年の鋭い思索を眩しく思う。外崎と内海がようやく到達した答えに、この少年はすでに自力で手をかけようとしている。あと少しのところまで来ている。ここまで辿り着けているのなら、あの二冊を読みさえすれば、あとはもう。

「全部、その二冊に書いてある」

「……え」

父親が不在なら自分の行為はかえって迷惑だっただろうか。ふと内海集司の心にそんな思いがよぎる。だが目の前の屈託無い笑顔を見るにつけ、まあ良いかと思い直す。少年が喜んでいいるなら、それでいい。自然と内海集司は思い出していた。自分の幼い頃のこと。父親のこと。父親に褒められた遠い日のこと。父親から電話があった日のこと。父親はどんな人間だったのか、何を考え、どうやって生きてきたのか。それを知りたいと思うようになったのは父親から遠く距離を置き、三十を過ぎてからのことだった。幼少時に父親の書棚からこっそり読んだ芥川龍之介や夏目漱石を内海は最近再読するようになった。小説の中に広がる世界は子供の頃とはまるで違って見えて、かつて髭先生に言われた言葉が何度も去来した。「小説は心と合わせるもので……心は時間で変わるから……つまり、時機があるんだ」声も口調もすべて思い出されて、閲覧室の冷たい空気が古い本の匂い、窓ガラス越しに歪んだ冬枯れの枝、傾いた日の光の中で舞う無数の埃まで鮮明に呼び覚まされた。あの日、内海集司は静かに涙を流した。だが今は髭先生の真意を理解している。髭先生の原稿を読むべき時機があったように、あらゆる小説には心と合わせるための時機がある。小説を基礎教養の一環と捉えていた父親が古典文学をどう読んでいたのかはわからないが、それでもこの不器用な親子は今ようやく、せめ

は知らないがほどなく出版され、当時はそこそこ売れた。だが昨年末の文庫化は内海にとつて青天の霹靂だった。かつて内海は外崎に頼まれて出版契約の条項に一通り目を通したことがあるが、文庫化については講談社に優先権があること以外は何も決まっていなかったはずだった。受賞作といえども文庫化されないケースは多い。一昨年も古泉迦十のメフィスト賞受賞作が二十三年目にしてようやく文庫化され、帯にでかかど「今まで文庫にしていなくてすみませんでした!!」と大書されたほどである。外崎の作品をどうしても出版したいと息巻いていた新井編の顔が浮かび、新井の遺した情熱を引き継いだ剛の者が講談社にいるのか、あるいはやはり講談社がよろしくやって今でも普通に外崎と連絡を取り合っているのか、内海にはもはや何もわからなかったし講談社の営業も事情はよく知らないようだった。とはいえ受賞以外のアピールポイントに乏しい文庫版は版元としても相対的に地味な扱いになり、売れ行きはよくも悪くもなく、他の多くの文庫と同様に初回配本の返本の時期が来た。内海集司はどうしても棚差しを返本できずにいた。これを返本してしまったらあの美しく輝く最後の日々、外崎が書き内海が読み共に星を見上げながら歩んだ事実、外崎がこの世界に存在していたことの確かな物証が消

内海の言葉の何かが少年の中で引っかかったらしかった。まずい事を口走ったかと内海集司は身を固くする。それを感じ取ったのか、少年は心の内を吐露し始める。

「や、なんか、ちょうど気にしてたこと、言い当てられたっていうのかな。ちょっと……びっくりしました。わかつてはいるんです。小説は人生のマニユアルなんかじゃないんだって。でも最近、ちょっともやもやしてて」

内海にはまだ話が見えない。少年は続ける。

「僕、その、物語の登場人物がいつもうらやましくて……竜馬も、半平太も、性格正反對だけど二人とも本当にカッコよくて、こんな風になれたらなって」

少し眩しそうに少年は遙か先を見つめる。あの有名な坂本龍馬さかもとりゅうまの写真と、どこか同じ目つき。

「せいぜいただのエキストラけど、せめて高校入ったら変わりたい。優柔不断なところとか、一步を踏み出せないところとか、なんとかしたくて」

そうだろうか、と内海は訝しむ。あんな風に迷いなく本を選び出せる時点で、自分よりよほど決断力があるように思えた。自身が本来持つ力に少年はまだ気づいていない。だが誰しもそういうものなのかもしれない。なかった。

「……………」

「……………」

続く言葉が思いつかず内海は黙り込む。少年も押し黙る。

気まずい沈黙の中、列車の走行音が緩やかにトーンを落としてゆく。横浜駅が迫っていた。内海集司は降りねばならない。今日もシフトに入り本を売って路銀を稼がねばならない。内海の中で何かが組み上がる。わだかまっていたものの正体が躊躇だと気づく。このまま少年と無残な姿の本を残して立ち去って良いものだろうか。大丈夫だろうか。本が傷つく辛さはよく知っている。だが、と内海集司は自問した。俺に何ができる。

逡巡する間に列車が完全に停止し、乗客が一斉に席を立った。まだぼんやりとしていた少年も慌てて立ち上がる。「わ、お、降り」ドアを見て、再びちらと内海を見た。どうやら同じく横浜で降りるらしい。話を繋ぐ好機なのは確かだった。むしろ話を繋がないければ完全に変な人と思われて終わる、と内海集司は危惧した。自らもドアに向かう人波に乗りながら、小声で少年に話しかける。

「あ……ちょっと時間あるかな」

「え」露骨に訝しげな顔をする少年。

内海は動揺した。

広い額に脂汗が滲み、顔が熱を帯び、眼鏡が曇るのを感じた。平常心を逸していることに気づき、その反応に自分でひどく驚いた。

なぜ。

なぜ、その本を。

少年は本をひっくり返して裏表紙のあらずじに目を走らせ、再度表紙を見返してから軽く首を傾かしげて、

「と……………のざき……………？ ま……………」

と小さく口にした。あれほど迷うことなく本を抜き出したというのに、知らない作家の名を唱えるような口ぶりだった。だが実際知らないのかも知れない。それも当然だろう。こちらもう三年になる。二〇二四年春、第二〇回小説世界長編新人賞を満場一致で受賞した新人作家、外崎真は、授賞式の直後に行方不明になった。もっとも知っているのは内海と彼の両親のほかは新しい担当編集くらのもので、講談社は失踪の件を公にしていない。外崎は授賞決定の電話の直後に受賞作の出版契約書を講談社と締結しており、失踪発覚の時点では単行本化作業がかなり進んでいて、という判断があったか

て互いの蔵書を読み合うことで失われた何かを取り戻そうとしていた。境遇は違えど少年も同じことをしているのかも知れなかった。

「そうか。うん」内海は何か大人らしいことを言おうとしたがまるで思いつかなかった。

「良い本が残ってたな」

「はい、僕、歴史小説って初めてで……父の本がなかったら、ずっと敬遠してたんじゃないかなって」

少年は愛おしそうに二冊の文庫本に目を落とすと、新品のカバー背表紙にある紺色の書店ロゴをしげしげと眺めて、

「きのくにや……」

と眩き、続いて店の前の青い看板を見上げ、もう一度本に目を戻して、  
「うへへ、紀伊國屋書店……………。一度、来てみたかったですよね……」

と陶然とした表情で言った。続く会話で少年は、京都在住であること、大阪の紀伊國屋書店は未攻略であること、先週末に中学の卒業式を迎えたばかりで、春休みを利用して、東京のおばさん、の所に遊びに来ていること、東京のおばさんは最近金沢文庫かなざわぶんこという所に引っ越したの다가神奈川のおばさんと言ったら怒られたこと、などを嬉しそうに

「その本」内海は言い淀んでから、発車メロディが鳴り始めた車外を一瞥する。「……まあ、まずは降りよう」

そのままホームに出た内海は人の流れを避け、階段と逆方向に進みながら次の手を必死で考える。少年も右手に本とノートとボールペン、左手に開いたままのリュックをぶら下げたまま、よたよたと降りてくる。また何か落とすんじゃないかとひやひやししながら、内海集司はホームの柱の陰に少年を手招きして尋ねた。

「時間、大丈夫か」

「はあ、大丈夫、ですけど……」

答える少年は全身から最大限の警戒心を放っている。内海集司は鞆からポケットティッシュを取り出して少年に差し出した。こういう遅番おそばんの前には自宅近くの市立図書館に寄ることが多く、これは最寄り駅のコンコースで今日配られていたカラオケ店の販促品だった。

「濡れたページに挟むといい」

「あ」

「応急処置だけど、このまま放置するとページがくつついて剥がせなくなる。紙もゴワ

みで言った。

「ていうか、なんかすごい楽しいです、旅先の本屋さんって」

内海もその気持ちは非常に共感できたし、自分の勤務先をそんな風に思ってもらえることが何より嬉しかった。

「なら良かったが……そうだ、帰り道、わかるか。このあと京急けいきゅうだよな」

「はい、京急本線です。金沢文庫駅まで」

「まずはエレベーターで地下二階だ。そこから地下街に出られるから、直進してエスカレーターを昇ったら右側に改札がある」

「行きとちょうど逆ですよね」少年はドヤ顔で親指を立ててみせた。「大丈夫です。

バッチリですよ。『横浜駅SF』で予習しましたから」

「それ予習にならないだろ」

「あの超絶難易度で予習したからこそ、現実世界が楽勝になるんです」

「チートアイテムみたいな読み方をするなよ……」

「……です、よね」

急に少年が神妙な顔をした。

話してくれた。金沢文庫を東京と呼ぶのはいくらなんでも詐欺だろう、と東京と神奈川の県境に住む内海は思ったが、うん、うんと頷きながら話を聞いてやった。内海集司にとって京都といえは高校の修学旅行で訪れたきりで、高二の内海は自由行動でわざわざ檸檬れんどうを手に書店の丸善まるぜんに突撃してやろうと意気込んだ。しかし丸善の京都河原町店かわらまちは二〇〇五年にとつくに閉店しており、ろくに下調べもせずに訪れた結果、河原町通蛸薬師どおりぐさ上ルの跡地に聳え立つカラオケ店を外崎と二人茫然と見上げる羽目になった。失意のうちに握り締めた檸檬の冷たさと質量が掌中に蘇る。その後二〇一五年に再び丸善が京都に開店したことはバイト先での雑談で知った。もし再訪する機会があれば自分もきつと店の前で少年と同じ表情をするだろうと内海は苦笑した。なお京都市内にもかつては紀伊國屋書店がしあが出店していたが二〇一一年を最後に撤退している。

会話が途切れた。ちよつと話すぎた、という顔をして少年は手中の二冊をリュックにしまった。リュックの奥の何冊もの文庫本が内海からも見えた。丸善、ジュンク堂、くまざわ書店のカバーは見るなりわかったが、どれも色褪せている。もしかすると少年の父親が集めた『竜馬がゆく』全巻で、少年はこの旅の間に読破する計画なのかもしれないと内海は楽しく妄想した。

えた力に望みを賭けるしかなかった。

事情を何も知らない少年は「本屋大賞の時から気になってました。なんか本読みへの挑戦状みたいなタイトルだなあって」と屈託なく笑った。そしてサイン色紙の怪異を見てうひいと眩くらき、怯えた顔で目を逸らした。

非番とはいえ職場での世間話はどこか憚られる気がして内海は素っ気ない返事をしたが、面白いよ、と付け加えて、少年に向かってそつと親指を立ててみせた。心から薦められる本なのは確かだった。少年も妙に安心したような顔でサムズアップを返す。

「よしっ、これ、読んでみます。えっと、あとはハヤカワの……」

少年は隣の棚に向かおうとする。だが何かに呼ばれたかのごとく立ち止まる。踵を返し、吸い寄せられるように講談社文庫の奥の棚に向かう。カラフルな背表紙が棚一面に並んでいる。少年は無言で棚の下段に目を留め、棚に差された一冊に手を伸ばすと、すつと抜き取った。その流れるような所作には一切の迷いがなかった。取り出した本の表紙を少年は無言で眺めている。内海集司は書影を一瞥した。地味な装丁に比べて派手な色の帯には大きく「第二〇回小説世界長編新人賞受賞作」、その下に少し小さな字で「待望の文庫化」「森見登美彦もりみ とみひこ、宮内悠介みやうち ゆうすけ、各氏絶賛」と書かれていた。

彼に委ねよう、と思った。

邂逅の終わりは近づいている。そろそろシフトに入る時間だった。といってもこのままバックヤードに直行するわけにはいかない。一旦地下に降りて、改めて従業員用入口から入館する必要がある。腕時計に目をやる内海に気づく少年。

「あつ……お仕事ですよ、すみません、お時間頂いてしまつて」

「ああ、そろそろシフトだから……ハヤカワはあつちの棚で、レジは向こう」

内海はレジの方向を指差したが、バイトの後輩がこちらを睨んでいる気がして慌てて目を逸らした。

「はい、えっと、何から何までお世話になりっぱなしで、なんてお礼を言ったらいいか」

少年の口調にもはや臆病風は微塵も感じられない。才気溢れる、堅実で実直な好青年の姿がそこにあった。

「いや、むしろ無理やり連れてきて悪かった。……本当に無理に買う必要ないからな」「とんでもないです、絶対買いますから。この二冊はもう決定ですよ」

髭先生の本と外崎真の本、二冊を見せびらかすように少年は反駁してから、満面の笑

ゴワになるし、早いほうがいい」

ティッシュを挟んでも濡れた本は元通りにはならないが、乾く前に処置すれば事態の悪化は防げる。小説と共に生きてきた内海集司は本の扱い方をよく心得ていた。特に外崎真と一緒に外崎が鞆から本を出すと雨染みができている。外崎のランドセルの奥からページが屏風のようになった本が発見される。そんな時、内海集司は黙って対処してやる係だった。外崎本人はズボンの泥はねもシャツのカレーの染みもさして気にしていなかったが、本が濡れた時だけは「内海君……」と継る子犬のような目で内海のことを見る。いつだったか髭先生がふやけた本を手に「内海君……」と声を掛けてきたことさえあった。よく見れば髭先生自身も全身ずぶ濡れで、水浸しの毛の塊が寒さで小刻みに振動する様子はさしずめ新・本所七不思議の一つ《震えわかめ》とか呼ばれてそうな怪奇現象であり、何をやらかしたんだこの人と内海は眉を顰めつつも本だけ受け取って黙々と処置した。現象としての震えわかめちゃんは毛先から水を滴らせながら、内海の作業を眺めてしょんぼりとしていた。あの時に比べれば今回はだいぶ軽症の部類に入る。少年は内海の言葉に目を見開き、うわっと小さく声を出してから、驚愕と納得と感激

所によればモジャ屋敷も荒れておらず、口座連携されたクラウド会計ソフトで見る限り税務上は何の問題もなく、内海は未だに年一で田所に呼び出されて税務報告とばかりと芥川研究を聞かされ続けている。三年前のハードカバー出版時には内海の勤務する書店でサイン会が開かれさえした。講談社の担当編集と事前に何度も調整して前日頑張つて準備したのに寝て起きたらサイン会の翌日になっており、「店長へ 休ませてもらいます 内海」というあり得ない筆跡と内容の書き置きがバックヤードに置かれていたと聞かされ内海集司は訳がわからなかった。まさか内海君がドタキャンねえ、事情は訊かないけど残された僕ら大変だったんだからねもう、と店長に泣かれながら、あるいは自分を蛇蝎の如く忌み嫌っていたニアムならやりかねないと内海は勝手に責任転嫁したが、ニアムの仕業なのか、もしくは講談社が人智を超えた力でよろしくやつてくれているのか、そもそも髭先生は本当にサイン会に現れたのか、全部がわからずじまいだった。だがそんなことはもはや内海にはどうでも良かった。「書くから」と髭先生は言った。「書くから」と外崎真は言った。それが内海と外崎の約束のすべてだった。だからこれからもきつと髭先生の新刊は出続けるし自分はそれを読み店頭に並べるのだろう。とはいえ次の機会がいつになるのかは皆目見当がつかず、講談社の担当編集の人智を超

じゃあ他の本見てきます、本当にありがとうございます、と少年は再三礼を述べて一人で店内に入っていたが、左側に進みかけて立ち止まり周囲を見回している。おい、そつちはビジネス書だ、と見守っていた内海集司は顔を顰める。店内は環状構造になっており、入店した客は右に進むか左に進むかの選択を迫られる。左側はビジネス書、奥には県内有数の規模を誇る専門書コーナーも控えている。もちろん新学期に向けて自己啓発本や専門書という選択肢も十分にありなのだが、少年がハヤカワ文庫に言及していたのを内海集司は覚えていた。案の定少年はきよろきよろしている。本の森で迷う楽しさも内海は知ってはいたが、大股で少年に追いついて尋ねた。

「文庫？」

「え」別れて十秒後の再会に少年は戸惑いつつも、その目はそうです凶星ですと雄弁に語っている。

「文庫はあつちの奥」

内海は逆方向を指差すが、文庫の棚はここからは直接見えない。手招きして、そのまま流れて店内を先導する。同僚に見られると気まずいのでレジ前を避け、雑誌や実用書の棚の間を通り抜けて奥の文庫本のコーナーに向かう。通りがかりの平積み of 乱れをつ

を顔いっぱい広げる。いいんですかすみませんありがとうございますとございますと周囲が振り返るほどの勢いで礼を連呼しながらティッシュを受け取る。本の汚れをそっと拭き取り、折れた部分の皺を伸ばし、水を吸ってたわんだページにティッシュを挟んでいく。手際の良い動作に内海集司は少し驚いた。これなら自分がお節介を焼かずとも早晚適切な処置を施していたかもしれない。一方で早めにかを出てきて良かったとも痛感した。今日は出勤前にルミネ横浜のGUで制服代わりの白シャツの替えを買う予定だったが、別に今日でなくても良いしシフトまでの時間の余裕は充分にある。でもまあそろそろ行くか、もうこいつも大丈夫だろう、と考えて声を掛けようとした矢先、ホームに立ったまま静かに作業していた少年が不意に小さく言葉を発した。

「父の……本だったんです」

「え」

「だから、本当に助かりました」

内海の方を見るでもなく、作業の手を止めずに少年はそう呟いた。

「……そうか」

気の利いた返しは出てこない。だが内海集司は腑に落ちる。選書の渋さ、年季の入っ

がそこに辿り着くのは時間の問題だろうと思えた。もしかすると髭先生と外崎の関係に勘づくこともあるかも知れない。あるいはもう気づいているのかも知れない。だがこの少年となら、世界の秘密を共有しても良いと内海集司は思った。何しろ寄合則世の話に従うなら、少年はとんでもないことをやってのけたことになる。何十ビットもの情報を、新たな秩序と意味を作り出した。有り得ない、嘘みたいな、だけれどもほんとうの話。

この少年には、強い力がある。

情報を生み出し、宇宙の意味を増やす力が。

内側で作ったものを外に出し、いつか世界を書き換えていく力が。外崎真と同じ種類の力が。その片鱗は少年の読書帳にすでに現れている。

だからもしかしたら、少年もいつか。

逆巻く時の向こう側に辿り着けるのではないか。

開闢のティル・ナ・ノーグの、さらにその先の地に。

そんな気がした。

二冊を大事そうに抱えた少年はここでもようやく内海の視線に気づくと、内海の目を見上げて無言で頷いた。選択に満足し、納得した表情だった。内海も頷き返す。大丈夫だ、

い手癖で軽く整えながら歩く。少年はあちこちに目移りしながら、興奮の面持ちで内海の後をついてくる。小躍りするような足取りに、内海集司は再び外崎真のことを考えた。生来の本好きというものは、本屋に連れて行って放せば大抵わかる。まあ書店に来るような人間は高確率で本が好きであり、本好きにも色々なタイプの人間がいることを内海集司は長年の接客業を通じて痛感していたが、少年とは不思議と気が合いそうな予感があつた。

「あ」

小さな声を少年が漏らす。内海集司は足を止めて少年の視線の先を辿る。文庫コーナーのエンド台に講談社文庫や文春文庫の新作が積まれている。並んでいる書影はすべて内海の頭に入っている。どの本に気を留めたのか気に掛かるのは完全に職業病だ。今月の講談社文庫は恒例の春フェアに加え、名探偵・雲雀殺シリーズの最新刊や本屋大賞受賞作の文庫化作品などの話題書が所狭しとひしめき、色とりどりの帯に強い惹句が踊っている。雲雀殺シリーズを除き、いずれも内海集司が自信を持って推薦できる本だった。

知らず知らず詮索の目つきになっていたのかもしれない。内海の射るような視線

に気づいた少年は、ばつの悪そうにはにかんだ。

「や、あの、文庫になってたんですね、これ」

そう言っただけで少年は、台手前の角に積まれた本を一冊手に取る。よりによって、と内海は思った。見慣れた表紙に、複雑な感情が胸に去来した。

「髭……先生」

無意識に内海集司は口の中で呟いていた。

かつて内海がモジャ屋敷で発見して講談社の担当編集者に渡した原稿、その文庫版だった。三年前の十一月に発売されたハードカバー版は翌年本屋大賞で三位を獲り、その快挙のせいか二年余りでめでたく文庫化されてそろそろ一ヶ月が経つ。破格の陳列にしたのは内海だった。帯に輝く「二〇二五年本屋大賞第三位」の文字、陳列の横には後輩に書いてもらったPOP、さらに著者本人の手によると思われる、書店のロゴを擬人化した薄気味悪いというかキモ可愛い絵が描かれたサイン色紙まで飾られて、エンド台に異様な雰囲気の一部を形成している。二〇二四年六月のあの日、髭先生は若返ってニアム・シンオールと一緒に向こう側に旅立ったはずで、それきり内海も会っていないが、なぜかこうして文庫版は出るし増刷は掛かるしサイン色紙は送られてくる。税理士の田

少年がやったこともきつと同じだ。

この宇宙に通底する、万物が集まって秩序化する潮流、拡散に逆らってエントロピーを減らし世界の意味を増やし続けようとする流れの、一つの自然な現れでしかない。

少年はまだ表紙を見ながら押し黙っている。知られざる作家の作品だから迷うのも無理もない。最近の講談社文庫はシュリンクが掛けられているから試し読みは不可能で、もし少年が困った素振りでこちらの表情を窺ってきたり意見を求められたりしたら、シンブルに薦めようと内海は考えた。「これ面白いですか？」は客からよく訊かれる質問の一つで、書店員として無難なセオリーのようなものはあるにはあるのだが、それを少年に返すのも躊躇われた。とはいえ、滔々と語るのも全然違う気がして、とにかくとても面白い小説であることは素直に伝えたいと思った。

だが少年は内海を一切見なかった。ただ本を見て、臉を閉じ少し思案して、再び見開いた時にはすでに瞳に決意の色があった。フィクションに身を委ね、虚構に深く潜ることを決心したひとりの冒険者の顔だった。少年が何を思ったのかはわからない。けれど覚悟を決めた少年に対して内海集司が言うべきことは何も無い。

この二冊の組み合わせには、内海集司だけが知る特別な意味が内包されている。少年

たカバー、そして本が汚れてあれほど狼狽し意気消沈していたのもそれが理由だろう。もしかして、と内海集司は少年の境遇に勝手に思いを巡らせる。父親と上手くやれていないのか。かつての俺のように。根拠の無い邪推と理解しつつも内海集司は止められなかった。過去の記憶が呼び覚まされる。まだ新座に内海家があった頃、うっかり父親の蔵書のページを折ってしまったことがあった。顔面蒼白になりながらも咄嗟に考えたのは新しい本とこっそり差し替えられないかということで、しかしすぐに不可能であると悟って幼い内海は絶望した。七歳児が本を入手するには父親に買ってもらうしかなく、僅かな小遣いで賄える額でもなかった。結局言い出せずそっと折り目を延ばして本棚に戻したが、いつ見つかって叱られるかと思うとリビングの本棚を正視できない日々がしばらく続いた。嫌な息苦しさを伴った罪悪感がまざまざと蘇る。自分の本より父親の本を損傷してしまうことのほうが何百倍も耐えがたいのだと、内海集司は実感として知っていた。

だが今なら、と内海集司は思う。

今の俺なら、差し替えられる。同じ本を買って、少年に渡してやることができる。

何しろ自分は書店員で、職場はここから徒歩五分で、書店員は社割で本が買える。

完全に親切の押し売りという自覚はあった。あるいは少年に手を差し伸べることで、あの日の幼い絶望を精算したいという身勝手な欲望なのかも知れなかった。そもそも差し替えが利くようなものなのか。電子書籍と違って紙の本はデータ以上の情報を宿す。あれが初版本だったりしたら目も当てられない。だが相手があの頃の外崎と同じくらいの年格好の少年で、読書ノートを付けるほどの熱心な読書家で、読んでいたのが『竜馬がゆく』の四巻でしかも父親の蔵書で、とここまでピースが揃ってしまおうと内海はもう後には引けなかった。もちろん無理強いはするまい、と自分自身に釘を刺す。

鞆をまさぐり勤務先である大型書店の名刺を取り出す。内海君ベテランなんだし少しは版元さんの営業も受けてもらえないかなと店長から支給されているものだった。代々の店長が自分を社員並に重用してくれていることは肌で感じていて、ありがたく思いつつもかつての内海はレジ打ち、品出し、問い合わせ対応以外の業務を固辞していた。だが最近はその業務も引き受けることが増えている。内海自身の心の変化によるところが大きい。その契機は三年前、二〇二四年晩秋に発売された髭先生の新刊まで遡る。特設した陳列スペースが評価されて文芸・文庫の担当を割り当てられた。社員の手伝いから始まり発注や返品を覚え、やがて生来の商品知識を買われて棚ごと任せられるようにな

言っちゃってもいいかもしれない。だって星も、銀河も、そうやって出来てきたんだから。

何かを選び出すことは宇宙の秩序化の本質で、それが嘘みたいな事象であるほど情報量は増え、秩序化は進んでいく」

とまあそこまで思い出したところで内海集司は戻ってくる。ここは本が集まる場所、そこで自分は働いていて、目の前には少年がいて、自ら選んだ二冊の文庫本を手にして

いる。

少年は選り取った。

数十万の書籍の中から髭先生の小説を選んだ。

数十万の書籍の中から外崎真の小説を選んだ。

その両者をこの少年は、同時にやってのけた。

そんな嘘のような話があつていいだろうか。

あつたつていいのかもしれない、と内海集司は思った。

原子や分子が集まって星や銀河を作り出せるのならば。

人の飽くなき心が小説という奇跡を生み出せるのならば。